

氏名	菊地 麻利絵
ヨミガナ	キクチ マリエ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第 15 号
学位授与年月日	2022 年 3 月 11 日
学位論文題目	特殊奏法が開くサクソフォンの新しい音響的可能性——《息の道》に向かう野平一郎のサクソフォン作品群の考察を通して——
博士論文審査委員会	（主査） 教 授 小串 俊寿 （サクソフォーン） （副査） 教 授 藤田 茂 （音楽学） （副査） 教 授 藤原 豊 （作曲） （副査） 特任准教授 有馬 純寿 （作曲） （副査） 沼野 雄司 （音楽学） （桐朋学園大学教授）
博士演奏等審査委員会	（主査） 教 授 小串 俊寿 （サクソフォーン） （副査） 教 授 工藤 重典 （フルート） （副査） 客員教授 菅原 淳 （打楽器） （副査） 教 授 岡田 敦子 （ピアノ） （副査） 准教授 伊達 英二 （声楽） （副査） 教 授 糀場 富美子 （作曲） （副査） 教 授 藤田 茂 （音楽学） （副査） 佐藤 淳一 （サクソフォーン） （北海道教育大学准教授）

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日 時	2022年2月5日（土）15時30分～18時00分
場 所	東京音楽大学 池袋キャンパス A 地下 102
判 定	合
審査結果の要旨	<p>菊地麻利絵の博士論文は、サクソフォンの特殊奏法を軸に、サクソフォンの新しい音響可能性を、とくに野平一郎のサクソフォン作品群を通して、論じたものである。</p> <p>本論文は1) 多様な特殊奏法を可能にさせた楽器学的な背景を論じたあと、2) 特殊奏法の現在のモデル・ケースに野平一郎のサクソフォン作品群を位置づけ、その具体的な記述を通して、3) 特殊奏法が必然的にエレクトロニクスに接合されていく過程を描き出すものである。</p> <p>1) については、サククス社を引き継いだセルマー社の楽器の歴史的な変遷を4つの段階に整理し、多様な特殊奏法を実現可能にした物理的な基礎を明確に示した点で、それ自体、重要な論考として認められる。</p> <p>2) と3) については、特殊奏法、またエレクトロニクスという、きわめて専門性の高い領域において、実践者の経験のなかに蓄積されてきた「暗黙知」に習熟する大変な努力を重ね、それを部外者にも分かりやすく説明しえた点は、十分に評価に値するものである。また、さらに、単純な技術論を越えて、特殊奏法、エレクトロニクス、また、それらの複合体によってもたらされる音響の具体相を分析的に記述しようとした姿勢も、サクソフォン研究の現在を鑑みるに、価値の認められるところである。</p> <p>本論文は、特殊奏法を議論の軸としたために、野平一郎の創作全般に対する視点に若干の弱さが認められることは否めない。また、特殊奏法が生み出す響きの科学的な音響解析や、それが電子音響に必然的に接合される歴史的な論拠を、論文のストーリーとしてもっと明確にすべきであったかもしれない。それでも、サクソフォン・レパートリーにおける野平一郎のサクソフォン作品群の意義、さらには、野平一郎が歴史的に属している現代の音楽創造の一系譜の意義を確かに示し得ている。今後のサクソフォン界の発展の一翼を担う論文との評価が、サクソフォン演奏に実践的に関わる審査員から得られたのも、そのためである。よって、上記の指摘は、菊地の今後の研究、また、奏者としてのいっそうの成熟のなかで解決されていくものであると認め、菊地の博士論文に合の判定をする。</p>

2. 博士演奏等審査委員会

日 時	2022年2月14日（月）17時30分～18時45分
場 所	東京音楽大学 池袋キャンパス Jスタジオ
判 定	<p>8名の審査員全員一致で「合」の評価であった。よって博士演奏等審査委員会の判定は「合」とする。</p> <p>前半にフランスのオリジナル作品 C. パスカル/ソナチネ、C. ドビュッシー/ラブソディの2曲と野平一郎の《アラバスク第三番》、後半に野平一郎《息の道》4つのサクソフォーンを奏する一人の奏者と電子音響のための～を演奏。4曲とも完成度の高い見事な演奏であった。特に電子音響（エレクトロニクス）との《息の道》では、菊地が博士後期課程で研究した全てが結集し、サクソフォーンのこれからを大いに期待させてくれる名演となった。</p>
審査結果の要旨	<p>主査 小串俊寿</p> <p>菊地は博士後期課程でたくさんのことを研究し学び、サクソフォーンという楽器の表現力の可能性を探求し続けてきた。最後にその集大成ともいえる思いのこもった見事な演奏を聴けて本当に嬉しく思った。これからより一層の研鑽と経験を積んでサクソフォーン音楽の発展に貢献して欲しいと切に願っている。ピアノの羽石道代、エレクトロニクスの有馬純寿の両氏に心から感謝申し上げる。</p> <p>副査 工藤重典</p> <p>総じて言えることとして菊地はサクソフォーンを熟知しており、そのテクニック及び楽器の可能性を高めることを示した演奏だと思った。この楽器の日本における将来性を考えていくのに必要な人材であろう。よりクラシカルなものも演奏する機会があればどの方向へ向かうのか、これからの課題になるのかも知れない。いずれにせよ菊地のこれからの活動、活躍に期待したい。</p> <p>副査 菅原淳</p> <p>前半の3曲、ピアノとサクソフォーンのバランスとアンサンブルがとても良かったと思う。フランス文化を感じる響きであった。サクソフォーンとピアノがこんな良い響きで聴こえてきて本当にすばらしい！《息の道》もとても素晴らしく、コンテンツポラリーのおもしろさがよく伝わってきた。これからも色々なことに挑戦して欲しい。</p> <p>副査 岡田敦子</p> <p>一瞬の無駄もない充実したコンサートであった。野平作品に向かうように、パスカル、ドビュッシーと並べた選曲も適切であった。安定した技術と表現で演奏家としてのプロフェッショナルなレベルを示したことはもちろんだが、野平作品《息の道》で会場の意識を一点に集め、高めていったことには感銘を受けた。</p> <p>副査 伊達英二</p> <p>エレクトロニクスを使った演奏を聴くのは初めての体験で大変興味深かった。ふと声楽でも使えないか考えた。全体としては音色、技術とも素晴らしく感心した。《息の道》は演奏場所を選ぶと思うが、もっと大きなホールで聴いてみたいとも思う。今後の活躍に期待したい。</p>

副査 糺場富美子

野平作品《アラバスク第三番》では、特殊奏法の演奏の安定さ、そしてダイナミクスの表現の仕方等、この曲を十分に把握した説得力のある演奏だった。羽石道代氏のピアノも素晴らしい。又、同氏の《息の道》を本学で演奏できたことは、これからの電子音響との共演の必要性を示す意義深いものになったと思う。

副査 藤田茂

今回のプログラムは菊地の博士論文の論点を音として実践するものであり、その意味で学位審査リサイタルに似つかわしいものであった。様々な奏法により実現される様々な音色が、全体の進行の中にいかに配置され、それがどのような音楽的時間を作るのか、今後の課題として欲しい。大いに期待している。

副査（学外委員） 佐藤淳一

前半の三曲はとてもクオリティが高く、博士学位審査として申し分のない演奏であった。いずれ歴史的なその時代の楽器を使用して演奏するのも興味があるところ。《息の道》では素晴らしい作品を、エレクトロニクスと共に、菊地の才能と努力に最大の賞賛をおくりたい。《息の道》は生の道であり、人としての道であると思う。菊地のこれからの活躍の道を期待するところである。

以上